再発高危険群を選別でき、これは細胞診の敏感度を大きく凌ぐものであった。さらにこの群分けで、生存率にも統計学上有意な差が認められた。胃癌手術症例において腹腔内洗浄液を採取し、CEA の定量的 RT-PCR を施行することで、腹膜再発予測、癌の悪性度評価に有用である可能性が示唆された。

5. Suppression of the Th2 pathway by suplatast tosilate in perennial nasal allergic patients
（通年性鼻アレルギー患者におけるトシル酸スプラタストによるTh2 経路抑制）

古城門恭介
（展開医科学専攻病態制御医科学講座　頭頸部外科学）

【目的】今回 Th2 インヒビターの一種であるトシル酸スプラタスト（IPD-1151T）を用いて鼻アレルギー患者の鼻粘膜における Th2 経路について検討した。

【方法】検体は通年性鼻アレルギー患者の下鼻甲介粘膜より採取したものを用いた。浸潤細胞には免疫組織学染色を用い、サイトカイン濃度には ELISA 法を用いて検討した。

【結果】鼻アレルギー症状は IPD-1151T 内服 1 カ月後に有意に軽快した。浸潤細胞数の変化では CD4 陽性細胞と好酸球は内服後に正常レベルまで有意に減少した。サイトカイン濃度の検討では IL-4、IL-5、IL-13 は内服後に正常レベルまで有意に減少した。一方 RANTES は内服後に有意な変化はなく、正常例よりも高かった。また、IL-4/IFN-γ IL-5/IFN-γ は内服後に正常レベルまで減少した。

【考察】鼻アレルギーの病態は様々な細胞から放出されるサイトカインの複雑な関係により成立しているが、Th2 経路は重要な役割を成していることが示唆された。